

2009年(平成21年)3月26日(木曜日)

建設インフラチェーンフォーラム

唐津市で「産学官連携による地域振興」

全7回の6

産学官による多角的な連携で注目を集めているのが「農商工連携」だ。地域建設業でも、地元大学や自治体、協議会などの協働で、遊休農地の活用や新規作物の生産に挑戦する企業が増えてきた。北海道北見市内での取り組みを、北見工業大学の有田敏彦准教授と、舟山組の舟山秀太郎社長が基調報告で話した。

有田敏彦北見工業大学准教授

産学連携し人材を創出

北見市は、かつて世界一のハッカの生産地として知られ、現在はタマネギ出荷量が日本一を誇るなど、農業を中心とした第1次産業。市の農家戸数は急減。耕作放棄地が増えるなど、さまざまな問題が顕在化し始めた。こうした実態に歯止めをかけようと打ち出したのが、産学連携による地域再生人材創出構想である。



有田北見工大准教授

北海道北見市内での取り組み 基調報告

掲げたテーマは、地域特性を生かした「工学的農業クリエーター(創造者)」の育成。合併後の新市まわりの計画と連動させ、新規作物の生産体制強化や高付加価値化に主眼を置いた人材育成を行っている。対象は地域建設業の現場監督クラス(30〜40歳代)や農業後継者など。養成期

間はず2年間。1年目は座学、2年目は実技とし、立案したビジネスモデルの評価を経て終了となる。

教育に当たっては、工学分野を北見工大、農学分野を帯広畜産大

舟山秀太郎・舟山組社長

産業用大麻栽培を軌道に

インフラが成熟してくると、公共事業は間違いなく縮小する。新分野進出の必要性を直感したのは今から20年前。地域特性などを考慮し、造園部の苗圃を生かした無農薬ハーブ栽培に着手した。

1997年に農業生産法人を取得し、事業を独立化。現在、約60種類のハーブと20種類

学が担当。東京農業大学生物産業学部(網走市)が指導協力。公設試験研究機関や地場企業、農業者を含む産学官連携推進協議会の支援も得ながら、栽培から収穫、加工、商品化までのモデルをつくりあげる。

有田准教授は、「地域の特性・課題を集約し、新たな人材育成を



舟山秀太郎・舟山組社長

原謙一

鹿児島建設新聞(田

【産業クラスター】特定分野に關連する企業や大学、研究機関などがアドウの房(クラスター)のように連結し、産業創出を図っている状態。

通じて新規産業を創出する。オホーツク圏の自立的発展を支える『産業クラスター』として、今後その中核的役割を果たしていきたい」と意気込みを語った。

(カタログハウス社にも掲載され、認知度も全国に拡大している。4年前からは産業用大麻の栽培にも踏み切った。地元の産学官連携による産業クラスター研究会で「麻プロジェクト」を立ち上げて事業を推進。

2008年8月には、北見市が栽培特区(北海道チャレンジパートナー特区)の

認定を受けるなど、産業化への道が徐々に開かれつつある。麻薬成分のない産業用大麻は、建材や断熱材、合板、プラスチックなど加工用途が広い。ヨーロッパでは90年代から栽培が解禁され、遊休農地の解消と石油製品への依存軽減につなげている。